

乙 第 号

中上 佳寿彦 学位請求論文

審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

論文審査の要旨及び担当者

	委員長	教授	浅田 秀夫
論文審査担当者	委員	教授	和中 明生
	委員(指導教員)	教授	桐田 忠昭

主論文

Study of Treatment Methods for Surrounding Soft Tissues of Implants Following Mandibular Reconstructions with Fibula-Free Flaps

腓骨皮弁による下顎骨再建術術後のインプラント周囲軟組織における治療方法の検討

Kazuhiko Nakaue, Satoshi Horita, Mitsuhiro Imada, Kazuhiko Yamamoto, Tsutomu

Sugiura, Nobuhiro Ueda, Nobuhiro Yamakawa, Yohei Nakayama, Tadaaki Kirita

Dentistry journal 2020 Jul 3;8(3):67.

論文審査の要旨

血管柄付き腓骨皮弁による下顎骨再建術後の咬合機能回復に、インプラントを用いた顎骨支持型補綴装置による機能回復が試みられているが、腓骨皮弁はインプラント周囲の軟組織として適しておらず、インプラント周囲炎を誘発することが問題となっている。その為、インプラント周囲は軟組織処理が必要であり、通常口腔粘膜移植が行われる。今回、遊離口蓋粘膜移植によるインプラント周囲に獲得できた角化粘膜幅を評価項目として、用いた3つの固定法について比較検討を行なった。対象は2006年から2015年に腓骨皮弁を用いて下顎再建を行った患者のうち、インプラント治療を行い、最終補綴物を装着した5例17本のインプラントとした。結果は、3つの用いた固定法のうちMethod3のスクリュー固定式の義歯を術中に内面適合法を用い、口蓋粘膜を固定した方法が角化粘膜幅が有意に大きく獲得でき、本法が遊離口蓋粘膜移植術施行時において最も有用な方法であり、インプラント周囲炎を軽減できる可能性が示唆された。

公聴会では、移植粘膜の適切な厚さ、固定法として用いた樹脂の発熱による移植粘膜のダメージの有無、培養口腔粘膜についての質問がなされたが、いずれも的確な考察のもとに適切に回答されていた。

以上より、本研究は博士（医学）の学位に値すると評価できる。

参 考 論 文

1. 腓骨皮弁による下顎骨再建術後のインプラント治療における軟組織処理の検討
中上佳寿彦, 堀田 聡, 今田光彦, 山本一彦, 杉浦 勉, 上田順宏, 山川延宏, 中山洋平, 桐田忠昭. 日本顎顔面インプラント学会誌 19 巻 2 号
Page101-107(2020.10)
2. 手術シミュレーションを用いて歯槽骨延長術を行った歯科インプラント治療の一例
中上佳寿彦, 堀田 聡, 今田光彦, 桐田忠昭, 山本一彦, 杉浦 勉.
奈良医学雑誌 70 巻 4・5・6 号 Page63-67(2019.11)

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに口腔・顎顔面機能制御医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

令和2年12月8日

学位審査委員長

皮膚病態医学

教授 浅田 秀夫

学位審査委員

機能形態学

教授 和中 明生

学位審査委員(指導教員)

口腔・顎顔面機能制御医学

教授 桐田 忠昭